

隆瑜撰『五輪九字明秘密釈拾要記』の研究（五）

福田 亮 成

抄録

隆瑜（一七七三～一八五〇）撰の『五輪九字明秘密釈拾要記』は、興教大師覚鑒（一〇九五～一一四四）の主著である『五輪九字明秘密釈』の唯一の註釈書である。原本は、自筆本が智山書庫（京都・智積院）に所蔵され、『智山書庫所蔵目録』第一卷二三九頁の下段に、『五輪九字明秘密釈拾要記』、写、五卷五冊として登録されており、『智山全書』五に収録され、刊行されている。

本論文は、『大正大學研究紀要』第八十五（平成十二年三月）に、隆瑜撰『五輪九字明秘密釈拾要記』の研究（一）としてその翻刻文を投稿し、その後数回にわたり継続したが、その五分の三ほどで、いまだ完成していない。これらにもとづき、隆瑜撰『五輪九字明秘密釈拾要記』の研究（一）を『仏教文化論集』第十二輯（平成二十九年、川崎大師教学研究所）、（二）を『智山学報』第六九輯（令和二年、智山勸学会）、（三）を『川崎大師教学研究所紀要』第五号（令和二年、川崎大師教学研究所）そして（四）を同紀要第六号（令和三年）に書き下し文と引用資料の典拠を示し投稿したが、本論文はその（五）である。

持齋とは、凡そ住心所撰の善心に、六心有り。謂く、種子・牙・疱・葉・花・果なり。此の中且く最初の種子心に約して持齋と云う。名義を釈さば、失犯無きを護持して、故に名けて持となす。一日不食を以て齋と云う。『光記』十四^{左廿四}に云う、「西方の風俗は断食を齋と名く」と文。齋とは、潔なりと注する故に、不食を以て齋と云う宜なり。或は持齋は、節量食。節食とは、或は一日不食を節食と云う。或は少食を節食と云う。両説有り。元瑜の云く、此の二意放つべからず。疏の釈に依つて云く、「我今より少しき此の味を食し、常に自誠し節せんに亦善ならざるや」と文。此の意なれば、『韻会』に、節は量に注する義にして、ホドヨキホド二分節する義なり。是を亦た持齋と名くるなり。又一日不食の義も有るべし。機根區なれば、意樂も亦た随つて異なるべき故に^云。隆の云く、今は持齋節食と云う故に、持齋は一日不食、節食は少食なり。『行狀記』に、開山在国の内に、勤修精進の義を聞く。自余の戲を廉却し、四時に仏像を敬し、香花を備え、灯明を捧げ、或る時は穀味を断ち、或る時は水飲を絶して精勤修行し更に懈すと^云。之に依つて出国の後に、周処未生の如く現未を觀じ、^{いよいよ}弥実の如く持齋節食の理を知る^為。理とは、少欲知足の故に、昼夜經營するに自身安堵の計無し、還りて他に施す。善心起る道理を、実の如く証知するなり。第二住心の六善心は『宝鑰』に具なり、見るべし。時時に八関受くは、八関は八戒齋なり。此は是れ一日一夜等の護戒なり。故に在俗の受持する所なり。『大乘義章』の十二に云う、「八戒齋は、謂ゆる不殺と不盜と不姪と不妄語と不飲酒と不歌舞伎と不着香薰香と不上高広牀と不過中食と、是れ其の名なり。此れ等は防禁の故に戒と為し、潔清なれば齋と曰う」と文。『薩婆多論』の一に云う、「問うて曰く、夫れ齋法は過中不食を以てすれば、乃ち九法有り。何が故に八事を以て名を得るや。答えて曰く、齋法は過中不食を以て体とし、八事を以て齋体を助成す。共に相い支えて持すれば、

『定弘大全』三・一二二

『大正』八・八三七b

円測
(六一三)六九六

八支齋法と名く。是の故に八齋と言いて九と云はず」^{已上}。又此の齋戒は、一日夜に限る。其の護戒の時、至極短きが故に、未だ前に明かす尽寿の五戒に及ばざるの在俗の人受持す。但だ此れ異義なり。「薩婆多宗には、毎日晨朝に師に対して而して受く。其の護戒の時、一昼夜に限る故に」。『四分律』には、「長時、乃至尽寿の受持を許す」^{云以上}の云う。今、薩婆多の意に依るが故に時々受八閔と云うなり。倍倍成果を願うとは、如実の云う、『薩婆多論』の「云う、「有る経に説く、若し閻浮提の王と作れば、閻浮提中の一切の人民の金銀財宝に於いて、中に於いて自在す。是の如くの功德有りと雖も、八齋の功德を以て分つて十六分と作し。閻浮提の王の功德は、十六分の中に於いて一分に及ばず」と文^云。此の説に准じ、今、倍倍とは、十六分の功德成果ならんか。然りと雖も紫宸殿等とは、第二住心の所得の果を明かす。倍倍願うと雖も漸く粟散王の果を得る。雖然の二字、語勢爾なり。其の故に『宝鑰』^下、『仁王經』を証とし、中に云う、「中・下品の善粟散王」と文。宗家の意は、上四輪王は、惣を表し、愚童持齋の撰に非ず。中下品の善は、信外異生となす故なり。之に依つて下の頌文に云う、五常十善漸く修習すれば、粟散王も其の旨を仰ぐと文。元瑜の云う、頌文二句の意は、謂く愚童持齋の行者、五常十善の修力を以て相施をなすに、其の功終に尊宿に及ぶ故に。粟散輪王も、此の修習の力を見て五戒十善の教旨を讃仰するなり^{為言云}。粟散とは、道液の『仁王疏』に云う、「禄を散じ、賢を養う、以て人に主たる故に粟散と云う」^云。円測の『仁王經疏』に云う、「衆多なること猶し粟を散らすが如し、喩に従えて號を立て粟散王と名く」と文。日本も、粟散王の一なる故に、今、所依を挙げ能住人を顕す。前生の舊所とは、過去の宿福を示す。五欲の妙境とは、謂く色と声と香と味と触となり。王の受用する境なる故に、妙と云う。『智論』第五^{左廿}に云う、「五欲を花箭と名く。又は五箭と名く。種々の善事を破る故に。行者、当に訶

『定弘大全』二・七〇

『大正』六〇二b

『大正』三九・六〇五c

して云うべし、哀れなる哉、衆生常に五欲のために悩まされて而も求めてやまず。將に大坑に墜ち之れが轉劇を得ること火の灸するが如し。療に五欲の益無きこと、狗の骨を咬むが如く、五欲諍を増して鳥の肉を競うが如し。五欲、人を焼くこと逆風に炬を執るが如し。五欲、人と言すること毒蛇を踏むが如し。五欲、実無きこと夢の所得無きが如し。五欲、久しからざるごとく假借の須臾の如し。此の五欲暫時の樂を得るに失する時、大いに苦なり」と文。『釈氏要覽』下^八に之を引く、此の中の八齋戒の事、『住心論』第二^{覺註}十七^丁を見るべし。『釈氏要覽』上^{五十三以下}に委し。『初禪の高臺』等とは、第三住心なり。今章、短舌の故に扱い難し。意之に依つて第三住心を弁ず。『宝鑰』上の住心略釈に云う、文を引くべし。『嬰』は、小兒の通称なり。嬰は、女人の頸の飾なり。頸の飾を垂れて胸の前に至る故に、胸の前を嬰と云う。小兒をは胸の前に按じて乳養す故に、之を嬰と云う。『無畏』とは、八心の中に第八無畏依の嬰童心の句を取る。立名し玉う故に無畏と云う。十住心の得名は、勝るる心品を取りて其の名を建立したもう故に、今も亦其の意なり。是れ則ち生天の位を得て、少分の厄縛を脱する故なり。外道生天等とは、此は行相を釈す。中に於いて初の二句は、無畏の義を釈す。後の二句は、嬰童の義を解す。外道生天とは、『大日經』に、「彼れ戒を護り天に生ず」という是なり。意の云う、外道の人界の苦を厭い、戒を護り禪定を修して天に生ずる義なり。暫得蘇息は、暫は後位より之を判するなり。快公^{三ノ十}に云う、「三界の諸天、其の寿命長遠なりと雖も、仏果の常樂に対して暫と云うなり」。蘇息とは、六無畏の『疏』^{初ノ三}に云う、「梵音の阿湿婆婆、正訳には当に蘇息と云うべし。人の強力者の為に喉を持扼^{とりくひ}られて氣を閉じ、將に悶絶せんとするに垂^{おさ}んで、忽ちに放捨を蒙り還つて蘇することを得るが如し」^{云々}。是れ則ち人界の苦を離れ天に生ずるの益なり。如彼嬰兒等、喩を以て嬰童の義を釈す。此の中の意の云う、彼の外道天上に生ずるをもつて無畏常住の処と

『定弘大全』二・一〇九

444/3

『定弘大全』二・一二六

444/4

『定弘大全』二・一三三

思えり。彼の嬰兒と犢子との母に随い、無畏の想いを作すが如し。是れ又愚癡の無畏の義に喩うなり。犢子随母は、『大般若』五百四十八に之れ有り。問うて云う、第三の生天は欲（六欲天）・色（四禪）・無色界に通ず。今なんぞ初禪のみを生ずや。愚按ずるに、『十住心論』第三冠注二に云う、「羝羊に自性無きが故に善に遷る。愚童内熏の力の故に苦を厭い、戒を護り天堂に生まれ、善を修して地獄を脱るが如きに至つては、下を惡むの心やや發り、上を欣うの願初めて起る。是に於いて帰依を彼の三界の天龍に求め、虔誠を此の神鬼に尽くす。拔苦の悲を仰ぎ、与樂のかえり眄みを祈り、影は形に随つて直く、響は声に随つて応ず。三途の苦果は、前世の因に畢して出づ。四禪の樂報は、今世の縁に感じて昇る」と文。此の文の意は、十惡業因は前世に既に彼の惡趣を出でて欲の天堂に生じ、やや上を欣う願ひ起るが故に四禪樂報を得る為言。之に准ず。今、初禪の高臺は過去慢處とは、魔波旬天ならんか。故に慢處と云う。魔波旬は、次第に續生して初禪高臺に入るが故に過去慢處と云う。魔波旬とは、『廣論』冠注二に云う、「起世經」に云う、他化天の上、初禪の下も、中に於いて魔波旬の宮殿有り。身光は上より劣り、下より勝れり、威力自在にして仏と力をきそ拏う。他化に属して更に別に開せず」と文。若し爾らずんば、過去慢處の言、解し難し。『真俗雜記』第十二右に云う、「安然の『教時義』第四、『瑜伽論』に云う、第六天王他化自在天宮の辺、また魔王宮殿有り。天台に降影の釈を引く、魔王宮殿は欲・色界の二界の中間に在り。大宝房殿中、即ち是れ『大集經』に説く處なり」と文。離生喜樂とは、『住心論』第三冠注三に云う、「若し異生等の初の近分に依つて世俗の無間に欲の有漏を厭い、麤苦障の三の随一の行相なり。諸の解脱道に、初めの根本の五支の靜慮を欣ぶに、靜妙離の三つの随一の行相あり。離生喜樂の下品に随往するものは則ち此の中に生ず」と文。『法界次第』の上に云く、「根本と言うは、四無量心、八背捨、八勝處、十一切處、神通變化及び

無漏の觀惠等諸禪三昧は、悉く四禪の中より出るが故に根本と称す」と文。『智論』の十七に云う、「初禪の相は、有覺と有觀と善と樂と一心なり。有覺有觀とは、初禪の中の未曾有所得の善法の功徳を得るが故に、心大いに驚悟す。常に欲火のために焼かれて、初禪を得る時は、清涼の池に入るが如くなればなり。また貧人の卒かに宝藏を得るが如し。行者、欲界は過罪なりと思惟し分別して、初禪は利益・功能はなはだ多しと知り、心大いに歡喜す。是を有覺有觀と名く。乃至、麤心の初念を覺とす。細心の分別を覺とす」と文。『離生喜樂』とは、此の名は樂生の三の中の隨一なり。且く初禪の五支の功徳に於いて別して喜・受・輕安の二支に就いて此の樂の名を云う云。如実の『冠』四十を見るべし。また生天の事冠註三の云。初丁問答の云。久しく受けて新たならず等とは、仏見到約し、離生喜樂は、元よりこれを受く。然るに嬰童愚癡暗迷にして、新たに蘇息無畏を思い得たりと。故に今、実に嬰童心を知ると為言。『住心論』第三冠註七に云う、「又大毘盧遮那如來は、諸菩薩・天・龍・鬼等の真言印を説き訖つて、即ち秘密主に告げて言く、是の如くの上首の諸の如來の印は、如來の信解より生ず。即ち菩薩の標幟に同ず。其の数無量なり、乃至、身分の挙動住止は應に知るべし。皆な是れ密印なり。舌根所轉の衆多の言説は、應に知るべし、皆な是れ真言なり」と文。如実の云う、「凡そ今教の意は、四重曼荼の聖衆、皆な是れ本有常住の仏体なり。六道四生の群類は、併しながら又自性清淨の法身なり。若し実類を除かば、則ち円坦の称成し難し。若し權化に限らば、則ち輪円の名欠し易さか、故に知んぬ。仏知の照見到約さば、凡夫本より等流法身なり。また密号、名字に依らば、実類の性ひととなり曼荼の聖衆なり。若し爾らば実類を挫おさえて權化と云わん。何んの失があらん」。故に延命院の『金界次第』に云う、「入我我入の故に、本尊と我と一体無二なり。但し本迹の義を表さんが為に加持歸依の觀有り」云。此の意は未斷惑の行者を指して本尊の垂迹となすに非ずや。然らば

『大正』三九・五八五b

446/1

445/4

則ち我等は、皆な自性を動ぜずして六道四生の形と成り、無明に随順して而して三途八難の苦を受く。源を尋ね流れを汲まば、皆なこれ遮那の垂迹なり。実類を挫えて大悲本尊を仰んに、何れの失ぞや。本を推して迹を見れば、併しながらまた法身の応現なり。凡夫を指して無辺の悉地を祈するに、豈に空しからんや。若し実類を捨てて権化を尋ねば、争か衆生即仏の觀を成じ。若し凡夫を思つて偏に聖者を愛さば、誰か凡聖不二の覺を開かんや。大悲曼荼羅は、正しく此の義を表すという。甚だ深意有る者か。伏して惟わば、我が宗意は現覺諸法の故に、貪・瞋・癡・慢、現に明王忿怒の姿を顯し、直約諸法の故には欲・触・愛・慢、直に菩薩慈悲の質の質と成る。五趣四生の鬼畜、これを隔てれば永く三途の苦海に沈む。八苦五衰の人天、これを隔てれば即ち五智の覺岸に到る。迷悟已に在り、執無くんば到るとは、蓋し此の謂か。況んや復た顯乘すら猶し性惡融通の故には、煩惱即菩提の説を馳す。此の密乘、豈に性相歷之故に、生死即生死の義無からんや^而已上。又云う、「彼の華嚴は、猶し九世相入の故に、第二七日に於いて未來流通の事を現す。況んや、大日進促自在の神力をや。所以に末代の我等が真言傳持等を、何んぞ悉く自性会に現ぜずんや」^{已上}。古徳の所解に、謂ゆる甚深なり。誰か仰信せざらんや。是れ則ち唯一の十界の生仏依止、無始以來常恒に互相加入し、彼此摂入する故なり。故に仏見に望むれば、則ち十法界、併ながら是れ毘盧遮那の本具輪円の曼荼羅、從心流出の聖者なり。若し衆生に約すれば、則ち在纏本有の曼荼羅なり。只だ是れ開不の差別なり。故に『疏』の一に云う、「一切衆生の色心実相は、本際より已來、常に是れ毘盧遮那の平等智身なり。仏、平等心地より無尽莊嚴大曼荼羅を開発して還つて用いて衆生の平等心地の無尽莊嚴大曼荼羅を開発したもう」^{已上}。応に知るべし、本有に約せば則ち十界互具融すれども、迷悟の不同有ることを。『宗鏡録』に云く、「仏界の中の衆生界は、迷々として所迷無く、衆生界の中の仏界は、

『定弘大全』三・一一六

『定弘大全』三・一七五

446/2

悟々として所悟無し」と文。如実。これに准じて離生喜樂も十界互具融通に約して、即ち遮那
 応現具徳にして、新成に非ず。然るに嬰童の愚癡迷暗にして其の理を知らず。新たに得ると思
 うが故に歡喜す。これに依つて実の如く其の理を知り厭患すべし。如実の弁、第三住心に於て
 極肝要の故に具に之を挙げる。尚を彼の『記』を見て悉く之を弁ぜよ。漸く火宅の薪を知つて
 等は、此は第四五心を含めて明かす。此れまた○在の故に四・五の名義の大意を弁ぜずとは、
 其の旨趣、通じ難し。先ず第四住心とは、唯蘊無我心と云う。『宝鑰』列名釈に云う、「唯だ法
 有のみを解して我人皆な遮す。羊車の三蔵、悉く此の句に撰す」と文。此の住心の得名は、『大
 日經』の「彼如是唯蘊無我」等の文に依る。『宝鑰』中左册四に云う、「已上の三心は、皆な是れ
 世間の心なり、未だ出生と名けず。第四の唯蘊已後は、聖果を得る出世の心と名く」と文。今
 章の漸字は、世出世の界泮を示すなり。唯蘊無我とは、『論』中卷に云う、「法を存す故に唯蘊
 なり。人を遮する故に無我なり。簡持を義となす故に唯なり」と文。簡持とは、人我を簡去し
 て而も五蘊の法を持取す故に簡持と云う。『俱舍頌疏』第九七に云う、「無我とは、正しく外道
 を遮す。謂く外道は我を執す。命終の時に臨んで能く此の蘊を捨て、受生の時に於て能く余の
 蘊続く。若し我有ること無くんば、誰か能く蘊続なり、故に我有るなり。此の報を破せんがた
 めの故に、無我と言う。唯だ五蘊のみ有り、更に実我無し。此の蘊の上に於て假立して我とな
 す」と文。『宝鑰』に、唯解法有とは、外道の人我を遮す義なり。また遮詮に大乘不二中道に
 異なることを示すなり。我人皆遮とは、『快』に、三義有る中、第二義に見・修の二惑の不同
 有る故に、皆な遮と云う。云。此の義好し。羊車三蔵とは、羊車は、『法花』譬喩品に、声聞乘
 を以て羊車に喩うる。三蔵の名は、大小に通ず。今、大乘の三蔵に簡て羊車三蔵と云う。悉く
 此の句に撰するなり。『論』第四冠四見るべし。唯蘊無我と説く、是れ則ち諸部の小乗の精要を

『定弘大全』三・一一六

『定弘大全』三・一七五

446/3

446/4

抽して唯蘊無我と説きたもう、故に義として一部声聞教、皆な此の句を撰尽す。然りと雖も人空法有の義は正しく二十部の中の有部に当る。余の十九部の中に人法二空の宗計多けれども、皆な是れ折空にして諸法即空の旨を了せず。故に尅論する時は二十部、併ら人空法有の法門に落在す、故に悉く撰等と云うなり。『開宗記』第三_五に問答有り、見るべし。第五住心拔業因種心は、列名釈に云う、「身に十二を修し、無明の種を抜く、業生已に除いて、無言に果を得る」と文。此の得名は『大日經』に、拔業煩惱株杙無明種子生十二因縁と説く文に依りたもう。『広論』五_三に云う、「業とは悪業、因は即ち十二因縁、種は無明種子」と文。是れ則ち縁覚所断の初劫、三種三妄の中の第三重の三妄執なり。修身十二とは、能觀を挙ぐ。十二因縁生滅流転の相を我身に約して之を修觀するなり。無明拔種とは、応に正しく無明の種を抜くと言うべし。而今、翻倒の句法に○なり。故に大意、此の釈には、因縁、身を修し空智種を抜くと文。或いは云う、凡そ十二因縁は、一切の独覺の修觀に通ず。謂く麟角の喩は、初發心の時に必ず十二因縁を觀ず。若し本性部行は、始中終に之を觀ずる故に、拋実通論せば、是の如し。若し惣相に就かば、唯だ是れ部行の修觀なり云々（因に云う、『広論冠注』_丁に縁覺の種類具に弁ず、見るべし）。今言う所の十二因縁も、亦復斯くの如くならん。始め無明より終り老死に至るまで、皆な有漏依身に就いて縁起の相を觀ずる故に修身と云う。又色受想行識の五蘊聚集して人体を成ずる故に身と云う。且く十二支の名義を釈さば、『法界次第』中_世に云く、「通じて因縁と称することは、是の十二法展転して能く果を感じる故に因と名く。互相に由藉して而有なり、之を縁と謂うなり。因縁相統するときは、則ち生老往還して、際無し。若し無明を知り、有を起取せざれば、則ち三界二十五有の生死、皆な息む、是れを出世の要術となす」と文。種子を解するに、『快』十一の二_十に、二義有り。初義は、不可なり。後の義、習氣と名く可なり。

『大正』一八・九・c

『定弘大全』三・一四五

浄影寺 慧遠
(二三四)四(一六)

『定弘大全』三・一四四

『定弘大全』三・一四七

種子を習氣と名く、料簡區なり。然るに、今此の種子は、現種相對之種子に非ず。株杙の対句を成ぜんが爲に、此の喩を挙ぐ。是の故に種子と云いて習氣と云はざるなり。また所生の十二因縁に應ぜんがために、能生の辺に種子の名を立つるなり。若し爾らば、是の如くの両意有りて習氣を種子と呼ぶならんか。業生已除とは、或が云く、此の一句は無明拔種の句を述べ明かすなり。何を以の故に、無明の拔種のみに非ず。業と生と已に除いて残すること無き故に、無言説の三昧を証す^為言。已除の言、既に決定して、已前の句に断惡有ることを示す。語勢分明の故に、此の二句は標名の拔業因種の釈に当るなり。生は是れ因の義なり。第三の一句は、「具緣品の經」に依つて、諸鈔に引くが如し。無言得果とは、其の証果を示す。此の文は、「具緣品」第二に、五種の三昧道を説く中の緣覺の三昧の道の文なり。緣覺は無言説の三昧に住するを至極の果をなす故に、第七の『疏』に、住無言説法不轉の文を釈して云う、「不轉とは、此の第一義に住する時^{住無説、法位}、声字有ること無き故に轉じて人に授くべからず^{転は説なり}。」又『宝鑰』下の文に、「三昧を無言に証す」と文。亦説法無くして人を化す、神通のみを現することを。『大乘義章』十七末^{三十三}に具に明かす、見るべし。また緣覺は諸經論中に於て隱顯・出沒不定なり。或は声聞を合して一となす。『瑜伽』廿八^七、『撰論』一^{三ノ左}、及び『莊嚴論』四^{左五}等の如し。或は開いて二乗を説く。『大日經』并に『菩提心論』、宗家広畧二論なり。若し細に之を論ぜば、則ち七異三同有り。『法花玄義』五^{四十一}に之を明かす。「天台文句」七^{三十一}は六同十別なり。『探玄』十一^{五十四}、『地論』四^{十三}に依り三同二異。浄影は五同六異『大義章』十七末^{六十一}。今章は声緣同に約して之を明かす。『火宅の薪を知る』とは、二心に通ず、法花門外の三車の意を踏んで句を作るなり。『宝鑰』中^{三十一}の頌文に云う、「人空無漏の火、智を滅し身心を殄くす」と文。是れ声聞の無余涅槃・灰身滅智なり。また同中^{五十五}の頌文に云う、「業と煩惱と及び種子を抜き、灰

『大正』三三・五七三・a

『定弘大全』三・一四四

『定弘大全』三・一四七

『大正』三三・五七三・a

『定弘大全』三・一四九

『大正』二六・四一・a

『定弘大全』三・一七五

447/3

447/4

身滅智して虚空の如し」と文。第五の無余涅槃・灰身滅智なり。『菩提心論』に云う、「久々に果位を成じ、灰身滅智を以て其の涅槃を越えて太虚の如く湛然常寂す」と文。此等の文に依つて二乗の依身は、三界受苦薪なる故に、火宅の苦を受く。故に無漏の智火を起こし、灰身滅智す。若し爾らば今章の火宅の火は、有漏の火なるか、考るべし。また今、二乗は定性・不定性か、分明ならざれども定・不定に通ずるか。『声縁の室に眠る』とは、第四頌文に云う、「儼如来の警に遇うて心を菩薩の寔に廻らす」と文。此の文に、室に眠る義、これ無し。但し、義に之を含むか。第五頌文に云う、「湛然として久しく三昧に酔臥せり。驚を蒙つて一如の宮に廻心す」と文。此の文、人空理に眠る義分明なり。今、室とは人空理なり。四・五の住心、俱に人空・生空の理を記する故に。此の三同の中、第一なるが故に、声・縁の空に眠るという。但し今章は、驚愕廻心の義無し、是れまた其の義を含む故に、次に『生空の理に味着すること勿れ』と云うなり。『実の如く二乗の小滅を知る』とは、滅とは寂滅涅槃なり。大乘に対して小と云うなり。『菩提心論』に云う、「定性有る者は、發生すべきこと難し。要ず劫限等の満を待つて方に乃ち發生す。若し不定性の者は、劫限を論ずること無し。縁に遇えば便ち廻心向大す。化城従り起て三界を超えたりと以為へり。謂く宿し仏を信ぜんが故に、乃し諸仏菩薩の加持力を蒙つて、而して方便を以て遂に大心を發す。乃し初め十信より、下も遍く諸仏を歴て三無數劫を経て、難行苦行して然して成仏することを得。既に知んぬ、声聞縁覺は智恵狭劣なり、また楽しむべからず」と文。此の文を以て二乗小滅を知る、意知るべし。また『宝鑰』中_七に『十住毘婆沙論』を引証し弁ず。『生空の理』とは、生空三昧の理なり。即ち人空觀なり。定相應の恵、能く断惑する故に三昧と云う。此の三昧の理は、即ち人空なり。『味着することなかれ』とは、此に於て驚覺廻心の義を顯すか。『他縁の廢詮』等とは、以下六・七住心なり。『宝鑰』の列名釈に云う、

「第六他縁大乘心等以下は大乘なり。中に於て此の住心は、大乘の初門なる故に殊更に此の名を得る。是れ則ち小乗に簡となすなり。三劫に約する第二劫なり。此の立名は本經の「復次大乘行發無縁心法無我性」の文に依りたもう。第二『疏』に云う、「梵音の莽鉢羅は、是れ無の義、または是れ他の義なり」と。今は他を挙げて以て無を兼ねる。蓋し是れ主名は利他を以て菩薩の本行となす旨を顯さんが為の故に」、下の章の釈段に云う、「法界の有情を縁する他縁なり。声独の羊鹿に簡ての故に大の名あり」と文。応に知るべし、他縁大乘の主名は、他に約すること。無縁等、初の二句は化他、後の二句は自証。初の句を解するに二義有り、後の義可なり。意は怨親平等の悲を起こして法界の有情を縁する義なり。是れ則ち他縁の釈名に当たるなり。大悲初發とは、快公の云う、「大悲初起とは、大乘の義なり。或が云う、此の一句、正しく小乗の慈悲の義有るに對し、彼は小悲にして大悲に非ず、故に彼に簡て大悲初起と云う」。『仏地論』第五_十に云う、「普く一切有情に於て諸法無我・真如平等の性轉じ、恒常に現行し、一切を救度す。故に大悲と名け、声聞等の少分を樂となし、行転の能く一切有情を濟度すること能はざるが如し」と文。今は此の意なり。劫影觀心とは、八喻の中の二を挙げ。余の六を顯す。是れ則ち依地の非有似有の義を觀ず。小乗の實有の法報を離る法無我なり。是の如く觀成熟する時に、三界は唯心なりと覺知する故に、小乗の心外實有の報を拂捨するなり。是を唯識遮境と云うなり。此の遮境に、『快』上_二右_{十四}に、三義有る中の第三義に云う、五重唯識の不同有りと雖も、皆な境を遣るの上の義門なる故に、通惣して今は違境と云う。五重觀は『竹』に『心經幽贊』を引く、また『広論』第六_十に、『義林章』を引く、見るべし。『廢詮』とは、此れまた短舌にして通じ難し。『義林』第二、『瑜伽』六十四、『唯識』第九に、世俗諦・勝義諦に於て各の四の名有り。勝義諦の四の名の中に、第四を勝義勝義諦と名く。または廢詮談旨諦と名く。

『広論』第六^{冠九十}に之を引く。『二教論』上^{十五}に之を出す。廢詮談旨は、円成実性にして自性に約し、体妙離言を勝義と云う。唯し真にして俗に非ず、正体智の境の故に応に詮談の旨と訓すべし。『義林』に云う、「勝義勝義とは体妙にして言を離れ迥に衆法を超するを」。解して云う、体妙等とは、此は真如の自体に約す。真如の自体は有に非ず、非空にして而も一真法界中一実の境界なり。故に嘆じて妙と云う。妙は、是れ不思議の義なり。不思議の故に言詮の及ぶ所に非ず、故に離言と云う。離言の故に人法相應せざるなり。人法相應せざる故に迥に衆法を超と云う。廢詮談旨とは、此は第四勝義の異名なり。勝義の第三は、二空の詮門に寄つて立名す。此れは是れ言詮を廢す。廢詮と云うは、唯一真如の故に詮旨と云う。即ち是れ詮門を廢して、一実の旨を談ずる故に義なり。元瑜『二教論講翼』上第四^{十五}に具に之を弁ず、見るべし。今章に廢詮とは、真実一実の理なり。性宗以上、一切衆生は真如仏性を具す。故に皆成仏の人となす。然るに法相宗は、五性格別と云う。如來乗性と及び不定性の二乗は成仏し、定性声聞と無性闡提とは不成仏なり。故に性に差別有りと云うなり。『覺心の不生等』は、『宝鑰』の列名釈に云う、第七覺不生等、此は三論宗に当たる。此の得名はまた本經の心主自在覺・自心本不生の文に依る。八不等の初二句は、先づ八不の觀門。後の二句は、覺心不生の釈に当たる。絶戲等とは、能所断相對にして不生不滅等の八不生の觀を以て生滅等の戲論を断する義なり。絶戲とは、『中論疏』一^{三十四}の二種・五種の戲論なり。謂く二乗及び菩薩の有所得心なり。八不戲論とは、二乗の戲論なり。次に一念觀空とは、有所得大乘の戲論を破す。一念とは、無所得の一念に八不を觀る故に有執と云う。心源空寂とは、謂く所觀の一心の本源には、八迷の戲論悉く皆な空無の寂滅なる故に、心源空寂と云う。此れは是れ第一の句に對す。『菩提心論』左^{四丁}に云う、「妄若し息む時は心源空寂なり」と是れなり。無相安樂とは、立名不空の義に当たる。既に無

吉藏（五四九～六三三）

『定弘大全』二・二四三

『定弘大全』三・一一四

『定弘大全』三・八

449/1

449/2

所得の觀に依つて大乘菩薩の有所得の心を離る。故に徹底性空の理を得る。即ち是れ八不中道の空なる故に、豈に無相安樂の義に非ざるや。謂はゆる『三論玄義』第三_下に、「無心の妙恵を以て無相の虚寂に契す」と云う、是れなり。因に云う、三論教派の中、此の住心は、嘉祥の相承に親しきこと、『住心論』第七_{初註}に云う、見るべし。また『宝鑰』大意の序に云う、「不生に心を覚る」等とは、不生とは、八不の随一なり。蓋し不生の言に即すれば八不寂然たる故に豈に不生に局らんや。もしまた『中論疏』三_左に云う、「利根の人は八不の初を聞いて、即ち悟れば重説を須いざるを云う」に准ぜば、今の此の文も利根の人に約して唯だ不生というのみか。覺心とは、心は謂く自性清淨心にして、即ち仏性眞識なり。不生の觀に仕て、本来不生の心地を知見する故に覺と云うなり。また此の一句は第六住心の無性に迷うに對し、心性之不生を悟る之義あり、正宗に對して知るべし。『独空慮絶』とは、此れは是れ觀成理頭の故に証理の功を嘆ずる義なり。是の故に『秘鍵』には、此の位を賛じて「独空畢竟の理、義用最も幽眞」と云う。『畧注』七_左に、一義に解して云う、「言亡慮絶の絶得の中道」と文。准じて之を按ず。其の義門、全同にして、最も嘉祥大師宗旨に應ず。『中論御疏』五_下に云う、「本来畢竟無所有にして唯だ実相法性のみ有るを以ての故に称して独となす」。『撰大乘』に云く、「眞如独り存すと、また此の意同じ。問う、何が故に此れ独り空の名を作して説くや。答えて云う、畢竟して一切の患累の有法無きを以ての故に称して空となす」。『大集』に云う、「不可説の故に相貌無き故に名けて空となす」_上。『慮絶』とは、謂く心行処滅の義なり。既に心の本不生を覺知する故に言亡慮絶なり。然るを今唯だ慮絶と云う義に言亡を顯すなり。『三論玄義』二_{科註十}に云う、「諸法実相とは、言亡慮絶す。実に破すべからず」と文。また此の一句は、第六他縁之境智を阻るに對して、心境俱空の義を明かす故に、独空慮絶と云うか。第六は、所証眞如無爲理の故

『大正』三二・五七三b

『大正』三二・五七三a

『定弘大全』三・一五〇

『定弘大全』三・一五三

449/3

449/4

に、境に生滅無く、能証智は有為、生滅有りと談ず。境知不二有無平等を知らざる故に、歎と云うなり。今章に、独空慮絶を知るべし。則ち一心等とは、『快』^{二七}の一義に云う、「隔句に義を取る。謂く心の不生を覚る之時、迷動の相を離るる故に一心寂靜と云う。独空慮絶の故に不二無相なり」^云。此の義好し。此の義は則ち字、上の二句の由を述ぶるなり。一心寂靜とは、八迷の散動を離る故に心体一味なり。『菩提心論』に「心体自如にして身心を見ず。寂滅平等究竟真実之智に位する」是れなり。不二無相とは、不二とは『中論疏』二本^{左三}に、「不二不異とは、上に例して応に言うべし。俗諦を以ての故に一に非ず、真諦を以ての故に異ならず。俗の故に一なること無く、異なると雖も而一なり。真の故に異なること無く、一なりと雖も而異なり。異なりと雖も而一なるが故に異に滯らず、一なりと雖も而も異なるが故に、一に着せず不二不異なるを名けて中道となす」という。是れ則ち不二の義なり。此の宗の義、俗諦全て真諦に非ず、波の波相を見ず、是れ入水性を見て不異と云い、不二と云うなり。実の如く有病空疾を知る」とは、有病は相宗なり。心外境境を遮して唯識と云う、是れ有病なり。諸法性空に帰して不異と云う、不二と云う、是れ空病なり。凡そ病と云うは〇なり、疾と云う、病重なり。『字書』を尋ねるべし。是れ六七の浅深を示すなり。『三大遠路を出る等』とは、『菩提心論』に云う、「復た三大僧祇劫を経て六度万行を修し、皆な悉く具足して然して仏果を證す」と文。『宝鑰』^{下右初丁}に云う、「是に於て芥城竭し還りて満つ、巨石磧^{ひすち}いで復生ず」と文。竭とは、一劫なり。還満復生と云うは、二劫・三劫時なり。是れ三大劫なることを示す。磧ぐとは、薄なり。此の宗の意は、必ず三無數劫を以て菩薩の修行時と定む。此の二喩は『智論』^{卅八之十四丁}に出ず。巨石の喩は『瓔珞經』に出ず、共に『竹』に引く。『述記』九未^{左十九}を見るべし。三無數劫の事は『心経幽贊』^云見るべし。『宝鑰』^{下五}第七住心釈に云う、「階級の無階なれば一念の成覚を

『定弘大全』二・五

『定弘大全』四・三一

『定弘大全』三・七

吉藏『二諦章』

『定弘大全』三・一五六

礙之ず、一念の念に三大を経て自行を勤め、一道之乘に三駕を馳せ、化他に勞す」と文。或は云う、此の中の化他は、因位修行の間の善巧方便の故に、果後化他の方便に非ず、未だ実の大悟を得ざる故に、実の仏果圓滿の覺位は、下の悲唯蘊已下の段なり云。此の説好し。此の段は、是れ理性前にして、是の如く談ずれども、一乗教と異なり、事に歴て実修の時は、三祇を経るなり。之に依つて『即身義』初丁の間に異義有り。法相三論を以て三僧祇となす治定なり。また『住心論』第一冠注に云う、「牛羊等の車は、紆曲に遂つて徐く進んで必ず三大僧祇を経る」と文。『大日経開題』一右初に云う、「仏花法花之牛は、顚関に啼いて而も未だ入らず。羊車鹿車の駕は、險路に疲れて數く退く。時、三大を歴て其の道懸に懇なり。位、五位を尽くし、其の理弥高し」と文。『秘鍵』に云う、「彼の教に依る人の智無量なり、智の無量に依つて時も亦多し、三生・三劫・六十・百妄執の差別、是れを時と名く」と文。此の釈は三劫の外に花嚴三生を挙ぐ。『畧注』四十には、三劫を以て法相・三論に配す。妄執の中に〇一密之宗有り。以て知んぬ。一乗は、三劫成仏に非ず矣。『戒序』左四、「六七を、三大僧祇となす」。「一念等は、念劫融即を明かす。諸章の『二諦章』中ノ十に、『三論宗は三劫成仏の義を談ずとは、『大乘玄』四十六に云う、『三大阿僧祇劫に、此の大恵を修するが故に名けて大となす』と文。『三大を経て』とは、『勝鬘宝窟』上末十六に曰く、「問う、為直に三大阿僧祇の時節の満を取りて、即ち仏を得るやいなや。答う、爾からず。若し直に時節を数えば、時節の中に於て或は空しく過ぐべきとき有り。今は、三阿僧祇念く善く相次ぐを取りて阿僧祇劫善満を取て方に仏を得る」云。全文見るべし。また一々解釈は、元瑜『記』下一三六見るべし。法華の本佛は猶し五百の始を指すとは、第八住心なり。法花とは、『宝鑰』下九に云う、「法花三昧に入り性徳の不染を觀じ、白毫の一光を放つて修成の遍照を表するが如くに至りては」等と文。蓮花三昧とは、亦是無量義

『定弘大全』三・一五七

『定弘大全』三・一五七

『定弘大全』二・三〇七

処三昧と名く。序品に云く、「諸の菩薩のために大乘經を説き已つて結跏趺坐して無量義処三昧に入り、身心動ぜず」^{已上}。今、蓮花三昧と言うこと『玄義』七^{五十一}に其の義有り、「言く、今蓮花の称は、是れ假喩に非ず。乃是、法花の法門なり。法花の法門、清淨にして因果微妙なり。此の法門を名けて蓮花となす。即ち是れ法花三昧当体之名なり（此の蓮花は難解の故に喩を取る）、譬喩に非ざるなり」と文。性徳とは、謂く所觀の体、即ち性具の三千なり。十界各々に百界を具す。百界各々に十如を具して千如なり。此の千如を三種世間に具すれば三千なり。此の三千の諸法は、即ち行者一念の妄心にして、性として之を具する故に性徳と云う。此の徳に差別隔歴の染汗の相無きが故に、不染と云う。又は理具の三千と名くなり。文の意を明かすは、諸法元より法爾の性徳の故に染汗すべきこと無し。即ち是れ一道清淨妙蓮不染の体なればなり。

『本仏』とは、『宝鑰』に云う、「指本遮末して成覺の久遠を談じ」と文。『玄義』に、謂はゆる拂迹顕本の意なり。本は謂く本門、未は謂く迹門なり。爾前より法花迹門に至るまで皆な今日始成の如來と説く。此の經の本門に至る久遠実成の仏なりと演る故なり。『寿量品』に云う、「一切世間の天人及び阿修羅は、皆な今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨菩提を得ると謂えり。然るに善男子、我實に成仏してより已來無量無辺百千万億那由他劫なり」と文。『五百の始』とは、五百塵點劫なり。又『宝鑰』に云う、「等覺の弥勒は、子の年の父に過ぎたるを恠しむ」と文。弥勒、之を恠しむ。此れは是れ五百塵點の實の久遠実成の如來なるを顯はさんが為に、此の相を現するなり。具には元喩『記』下第二^{百二十五}に之を弁ず、見るべし。繁を恐れて述べず。また今、八・九・二心を以て分の如実知自心と云う。此は是れ『広論』第十^初に、「如実知自心の一句に無量の義を含む。豎には十重淺深を顯す解釈に准ず。之に依つて如実知自心の句は十住心に通ずるに似る。然るに第八心に三名を出す。

『定弘大全』二・三〇七

451/1

『定弘大全』三・八三

『定弘大全』三・八二
『大正』四五・四七七a

451/2

中は亦名けて如実知自心と名く」と文。此の句を以て別に当住心の別名とすること不審なり。之に就いて古徳の会釈區なり。且く言う所の十重淺深之中に前九住心は唯だ是れ淺畧遮情分、この如実知自心なり。故に彼の首端に云う、「秘密莊嚴心とは、即ち是れ究竟して自心之源底を覚知す」と文。但し如実知自心を第八の別名となすは、蓋し淺畧九重中に所撰の法花・涅槃に於て此の法義を説くこと、最も増勝なるが故に、謂ゆる惣即別名義門ならん。又云う、仏因の句を説いて如実知自心乃至無相虛空相、非有非空等と云うことは、双に顯密遮情の真理を含む。故に『疏』第三^三に謂う、四心を明かす文あり、惣標の如実知自心を以て唯蘊・極無等の所寄齊の名と同じく、自所流傳の契これを経て能撰の名とす。宗家は亦た別説の無相相虛空等の諸文を以て、法身真如と明かす等と判したもうこと明らかなり。經の文を見るに、所寄齊の法門を含むことを（法花・涅槃は広く真如無為之理を説き、住心品の中には畧して如実知自心等を説きたもう。不同なる而已）。是れ則ち淨菩提心を偏に能寄齊の名とすると同ぜずと文。今は、此の意か。また正名、一道無為等は、元瑜『記』下第二^二以下・具に之を弁ず。之を略す。知るべし。また此の住心は境智を融し、知見心性を至極となす。『宝鑰』下^下、元瑜は具に記す、見るべし。華嚴の果佛は亦不談の説に留まる」とは、『二教論』上^上の『五教章』に云う、「別教、此れは是れ性海果分、不可説の義に当たれり。何を以ての故に、教と相應せざるが故に、即ち十仏の自境界なり。故に『地論』に、因分可説、果分不可説と云うは是れなり。二に緣起因分、即ち普賢の境界なり」と文。果分不可説の位は、即ち仏果十仏所知所証の境界なり。因人の所知に非ず。故に機と相應せず。故に何んとならば、理は円にして、言は偏なる故に。緣起の因分は、五十一位、六相・十玄等の所説の一切の法門、皆な之に撰す、華嚴当分なり。『同』^上十二の御喩に云う、「喩して曰う、『十地論』及び『五教』の性海不可説の文と、彼の竜猛菩薩の不

二摩訶衍の円々海不可説の言と、遙かに会へり。謂ゆる因分可説とは顯教の分齊なり。果性不可説とは即ち是れ密藏の本分なり。何を以て知るとならば、『金剛頂』に分明に説くが故に有智の者、審らかに之を思え」と文。上_三に具に二ヶ心を弁ず。但し横門遮論之日。八九絶離は浅深を見ず。豎門細論の日は、華嚴の不可説と、台家の絶離と大いに別なり。今、横門に約せば、八九俱に分の如実知自心と云うなり。此の二ヶ心は、正宗に於て委釈有れども、今は列名の釈に依り、畧して之を弁ず。如実一道とは、如実は、謂く真如実相。一道は、即ち一実中道の義なり。意は実の如く自心を知る一実の中道の義の故に、淨菩提心觀の注意を以て此の得名有るなり。一如本淨等、初の二句は、所觀の法体を挙げ、其の中の初の一句は如実を釈し、次の句は一道を解す。一如本淨とは、迷悟染淨、平等一味にして本来清淨なり。『妙句』第七之上_{一三四}に云う、「謂ゆる衆生の如と仏の如と一如にして二如無し」という是れなり。境智俱融とは、一道を釈して、能觀智・所觀理、俱に融会不二するは、豈に一道の義に非ざるや。此の宗の意は、能所觀俱に中道を以てする故に能觀の智無相なれば、所觀の境も亦無相なり。故に智の外に別の境無し。境の外に別の智無し。故に一味平等にして不二冥一なるは、即ち是れ中道の義にして、即ち一道の義なり。謂はゆる境即智、智即境、境智即般若波羅蜜と云う是なり。知此心性とは、上は如実一道之体を釈し、此は修行に依つて如実一道の理を得ることを明かす。故に知之等と云う。謂く境智不二の旨を知る。是れ如実知自心の義なり。心性とは、『妙玄』二之_{二二三}に云う、「心仏及び衆生是れ三に差別無しとは、但だ自ら己心を觀ずれば、則ち易となす」と文。号曰遮那とは、是の句は、能知の人を挙ぐ。是れ下章に謂はゆる此の理を証する仏を、亦た常寂光土の毘盧遮那と云う是れなり。第九極無自性等、此の住心は常途に約さば華嚴宗なり。此の立名は『經』一_右に「離有為無為○極無自性心生ず」という文に依りたもう。

『大正』三三・五七四b

452/3

452/2

立名に就いて『快』上^{三十八}に、二義有り。「一には極無自性の義を談ずる故に住心の得名となすなり、此の時は法界極理の自性を守らざる故に法界縁起を成ずる義なり。一に云う、極とは第八の住心の極理を指す。彼の住心の極位に密仏の驚覺を蒙り、極は自性無く後位に進むの位を、第九の住心となす故に、極無自性心と云うなり。或は云う、初の義は当住心の常談、次の義は第八驚覺の義に約す故に、今住心の意に非ず。今は第九の当分に於て立名有る故に、随つて驚覺も第九の当位に在るなり。水無自性等、この中の初の二句は、喩も挙げて名義を釈し、後の二句は、法に約し名を釈す。法界非極は極無自性の義の故に。此れ亦『快』左^{十八}に三義有り。初の二義は第八驚覺となし、第三義は当住心の当分を以て所驚覺となす。或は云う、家家二ヶの住心に於て驚覺の義を談じたもう、二の意有り、何んとは、一人転昇の次位に約すれば、第八は驚覺にして、而も後位之位を進めて第九を取る。若し又極無心を常途花嚴の一宗に約する時は、彼の至極を驚覺して後位を知らしむるは、是れ極無当分に於て驚覺を存する義なり。是の故に宗家に此の二途の判釈有るか。今、第九驚覺の義を以て文を解すに、水無自性とは、当住心の諸法極無自性に喩う。遇風即波とは、驚覺は縁に遇うて進む心品に喩う。法界非極等は、法喩と知るべし。花嚴は法界を以て宗とする故に。『探玄』第二^{左卅四}に、「法界縁起は遮那風神の力なり」と文。同第一^{四十一}、『教章』上^初見るべし。『五相五智之秘密』とは、以て第十住心なり。『五相』とは、『菩提心論』右^{十三}に之を明かす。三密・五相の觀に依り世出世を成就す。此は是れ眞言不共の妙藏余教超絶の行軌なり。名を教主というは、意此に在り。『遺教縁』第二^{右五}に云う、「問う、三業の実相とは、此れ何物ぞや。答う、三業の実相とは、則ち淨菩提心是れなり。問う、淨菩提心とは、此れ何ぞや。答う菩提心とは、此れ無始無終・本来常住・淨妙法身・摩訶毘盧サナ仏・心王心数・同一性・本来法爾・無垢本性・無垢堅固金剛菩提心是れなり」と文。三

浄厳
（一六三九）一七〇二）

『定弘大全』三・一〇九

『定弘大全』二・三〇七

『大正』三九・六八〇b

『大正』三九・七三〇b

453/1

452/4

密・五相は、俱に金胎に通ずるなり。三密の釈は、『菩提心論拾要記』下に云々。『五相』とは、『撰真実経』中^{丁初}、『守護経』九^八、『心地観経』八^{十三}、『教王経』十一^{十二}、『三摩地軌』^{丁廿二}、『蓮心軌』^{丁廿二}に之を明かす。「一に通達心亦是通達本心と名く。亦是無染心と名く。通達心とは見道之異名なり。凡身に性徳仏性有りて通達す。是れ本有の菩提心なり。」「入道章」に云う、此の位の菩薩無漏之智、真如を了証する故に通達と名く」と文。此の真言を徹心の明と名く。徹心とは、即ち通達の義なり。因みに云う、寂師の云う、一本『蓮心軌』に、五相真言を以て羯磨会五仏の真言となす。応に知るべし、五相は、是れ五仏三昧なり。『菩提心義』第八^{丁九}に引く、「通達心は、即ち法界体性智に通達し、余の四は次での如く四智に達するを以て」云。『尊勝大瑜伽五智品』中に、亦五相を以て五智真言となす云。然るに浄厳は、此等の義を弁ぜず。故に朱を以て軌の文を消滅し、別に傍に羯磨会五仏真言を書き加える。之を思はざることを甚しと云。隆の云う、浄厳の誤り明〇なり。此の解に準ずるに今章に五相・五智と相違すること、若しは寂師の云うが如きか。爾からず五相五智と相違せんか考うべし。五智と判すること『菩提心論』^{九丁云}。『拾要記』下に具に云。『秘密』とは、法身の三秘密なり。等覺十地を見聞すること能はず、故に爾か云う。『二教論』下^{丁終}に云う、「一乗を三に簡うを以て秘の名を立つ。総持は他の名を摂んで密号を得る。乃至、今秘密と謂うは、究竟最極法身の自境を以て秘蔵となす」と文。『智界理界之莊嚴』とは、『十住心論』第十三^{冠注三右}に云う、「秘密莊嚴住心とは、即ち是れ究竟じて自心之源底を覺知し、実の如く自身之數量を証悟す。謂ゆる胎藏海会の万タラと金剛界の万タラと金剛頂十八会の万タラとは是れなり」と文。隆の云う、今章の五相・五智等は、立名の六字を分つて句を作る。文に在り見るべし。智界・理界莊嚴とは、論釈の意なり。莊嚴とは、三秘密の体にして而も端嚴微妙の義なり。第十四^{丁四}に、「莊嚴とは、即ち是れ如來自性の体なり。体

『大正』一八・三二b

『定弘大全』三・二九

『大正』三九・六二七b

453/2

453/3

に無量の徳有るが故に、徳に無量の名あり。無量の莊嚴を以て自ら莊嚴す」と文。又十五_{右三}に云う、「万タラとは、種々の徳を具する義なり、即ち是れ秘密の徳なり。是の如く秘密の徳は、蓮花の開敷して而して自ら莊嚴するが如し」と文。是れ両部万タラなり。自覚本初之住心等_等とは、『即身義』_{左六}に云う、「法然具足薩般若とは、『大日經』転字輪万タラ行品第六_{右六}に云う、我れは一切の本初なり。号して世所依と名く。説法に等比無く、本寂にして上有ること無し」と文。宗家は釈して云う、「本初とは、本来法然に是の如くの大自在の一切の法を証得する之本初なり。如来の法身と、衆生の本性とは曰く、此の本来寂靜の理を得たり。然れども衆生は覺らず、知らず、故に仏、此の理趣を説いて衆生を覺悟せしめたもう」と文。本初者等とは、此は經の本の字を釈し、本来法然の義となす。是れ頌文の法然の義と合し、為作造作の義を假らず。即ち法爾常然なり。若し爾らば法爾法然として此の法有る故に本と云う。証得如是とは、已下初の字釈に当り、頌文の具足の二字に合す。即ち法然具足の義なり。大自在等とは、正しく所得の我体を出す。凡そ一切衆生は一切諸法に於て姿に假我の相を起す故に不自在なり。而るに仏は直に諸法当相を挫して一切法の本不生なるを覺知す故に、大自在と云うなり。第五_{左四}に「大我とは、謂く諸如来、八自在の義を成就して、法に於て自在なる者」と文。本相とは、謂く根本元祖と云わんが如くなり。今章已上、釈の意なり。本来常住具足なるの本覺仏を覺知する故に自覺という、自然覺という。法然に具足之覺知にして為作造作と假らざる義なり。此れ横門に就いて皆な是れ表徳の密義にして、十界は皆な自心の仏の名字なり。是の如くを満の如実知自心と名く。前九の如く未解脫の遮情の菩提心なり。第十は、遮表不二の菩提心の故に。深義更に問えとは、如実知自心に於て横豎の深義有り。上に於て粗述畢ることを此等の義を指す、深義更問と云うか。尚を明師に問うべし矣。

キーワード…持斎、五欲、性悪融通、吉蔵の列名釈、顕密遮情の真理